万葉の歌

15

人と風土——

北陸

中西進企画
山口博著

保育社

人と風土

万葉の歌

15

北陸

中西進企画

富山大学教授 山口博著

保育社

万葉の歌—人と風土— ⑮北　陸

昭和60年12月25日　印刷　　定価 1,400円
昭和60年12月31日　発行

著　　者　山　口　　博
発 行 者　今　井　龍　雄
発 行 所　株式会社 保 育 社
〒540 大阪市東区上町1—17—13
電話　06—762—1731 (代)
振替口座　大阪　6—12346
〒170 東京都豊島区南大塚1—1—2
印刷／セブン印刷株式会社
用紙／日本加工製紙株式会社
王子製紙株式会社

© 1985　山口　博　　落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70015-7 C0392 ¥1400E
PRINTED IN JAPAN　(NDC 910.8)

序

五月天山の雪　花なくして　ただ寒あり
笛中に折柳を聞くも　春色いまだかつて見ず

シルクロードの地トルファンからウルムチへの道は天山山脈を越える。私がそこを旅したのは七月であった。天山の高根には雪があったが、山間の白楊河沿いの道は緑の楊柳が美しかった。

楊柳の並木を見ながら、私は李白のこの詩を思っていた。「塞下の曲」と題されたこの詩は、西域守備の戦士の望郷の悲しみを歌っている。詩中にある笛の曲「折楊柳」は、別離の曲であるが、都離れて西域の砦で聞けば望郷歌であろう。

私は大伴家持の歌を思い出した。

春の日に　萌れる柳を　取り持ちて　見れば都の　大路し思ほゆ

武門の家に生まれ、天離る鄙の国の越中に赴任した家持は、まさに塞下の人である。彼は折れる柳を手に、楊柳曲を思い、故郷をしのんだのである。

家持がはるかに思いやったであろう中国に私はいる。中国はあまりにも黄土だ。北京の町の柳を手折っては家持を思い、美しい故郷の風土をしのんでいる。

この本は中国で生まれた。越中守家持は万葉集の巻十七を編んで都に帰った。私は明春再び楊柳が芽吹くころ、この本を持って日本に帰ろう。

いざ子ども　早く日本へ　大伴の　三津の浜松　待ち恋ひぬらむ

（唐土にありて憶良の歌）

万葉集は今も生きている。北陸の四季の風土の中に万葉歌を美しく生かしてみたい。

大伴家持没して千二百年の年の冬に

在中国日本学研究センター客員教授室にて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

口絵　北陸うたどころ

一、しなざかる越 ―― 二

越という名　2
　架空講演「北陸地方」　2　海山「越し」て　6　越は越か　9
神話の越の国　12
　まつろわぬ異境　12　神秘な力の国　15
日本海海廊　18
　海彼との交流　18　異国の王子の渡来　19　日本海海廊　21
　埋もれたガラス　23
北陸道　25
　湖西回り　25　陸路と海路　28

二、若狭路 ―― 三一

海のある奈良　31
　古寺の仏　31　若狭由来　32
後瀬山後も逢はむ　33
　後瀬山恋歌　33　家持と大嬢の恋　34　後瀬は後背　35
隠し色の青葉山　37
　若狭富士　37　隠し色　38
五色の三方湖　41

旅の歌集　41　五色の湖　41

三、越前の国の歌　四四

愛発山の沫雪　44
紅葉と雪　44　沫雪と淡雪　46
敦賀の津　48
敦賀の伝説　48　金村乗船　50　手結が浦　51　「乏見」の読み　53
塩焼く煙　54　越前守乙麻呂か　54　気比の古謡　56
いつはた、帰る　60
望郷のイディオム　60　忘れられた里　64
越前国府の古謡　66
武生の国府　66　挿櫛は　70　浅水の橋の　72
武生の大伴池主　75
大伴一族　75　奈良麻呂謀反　75　悲傷池主　77
戯歌の世界　80　叔羅川の鵜飼い　85
継体天皇伝承　88
味真野　88　越前の郡坂井郡潜龍　89　味真野潜龍　90
味真野悲恋歌　93
味真野苑　93　流人宅守　94　狭野茅上娘子　97
西の御廐の恋　98　禁じられた恋か　100　後人による目録　105
政治事件か　107　道の恋　110　夢の通い路　113　閨怨の歌　115

白鳳の甍　117

四、越中の国の歌

越前・越中の変遷　120
行政区画　120　木簡資料　122　越中の古道　124
デラシネの歌人家持　125
デラシネの歌集　125　大伴氏栄光からデラシネへ　128
海彼への目　131　樹下美人　132　生命の樹　134
よみがえりの花　137　アルミテスの美果香料　142　潘江陸海　142
家持昭和異聞　146
タイムスリップ　146　越中国庁跡　148　二上山　151
駒繋ぎの桜　155　平布の浦　159　家持の子孫たち　160
家持神社　161
越の深雪　166
大雪　166　都の雪の歌　166　婦負野の雪　168　しかすがに雪　170
都ぶりの歌　170　腰なづむ豪雪　171　雪のカーニバル　173
再び都の雪　175
越の桜　177
春花　177　旧宅の桜樹　178　花瓶の桜花　179
能登行　180
三百キロの旅　180　志雄路越え　181　熊木の民謡　187

饒石川 189　珠洲の海 191　長浜から治布へ 193
別れ 194
望郷歌 194
五、越後の国の歌 ―― 一九八
貴種流離の家持 198
越後の北陸道 198　家持伝説 199
沼名川の底なる玉 201
ヒスイ幻想 201　沼名川を求めて 204　奴奈川媛 210
奴奈川媛の社 211
伊夜彦地名論争 213
弥彦は越中か 214　大宝二年以前説への疑問 215　編者の誤り 217
伊久里の森はどちら 217
三条市井栗 217　富山県砺波市井栗谷 219　三条市説の勝ち 219
六、万葉伝来北陸ライン ―― 二二一
越中家持撰 221
越中最後の夜 221　越中における撰集 222
前田家の祖菅原道真の綜緝 225
家持と道真 225　道真の証言 226
能登守源順の訓読 228

任能登守　228　万葉訓読　229　送別の宴　230　老学者の死　231
前田家伝来の古写本　231
万葉の古写本　231　前田家から桂宮へ　231　利家奥方所持の本　232
国宝の金沢本　233　万葉北陸ライン　234
参考文献　236
万葉地名案内　238
この本に載った歌の索引　248

凡例

1　とくに注記する以外、万葉歌（読み下し訳文）の表記は、小島憲之・木下正俊・佐竹昭広著「日本古典文学全集」『萬葉集』㈠～㈣（小学館刊）による。

2　引用歌の表記が小学館版『萬葉集』と異なる場合は、（　）内に著者の考えにもとづく表記を記す。

3　日本年号は書紀による。

装丁　日本デザインセンター
題字　戎家契雲
写真　山口　博・小原直久
地図　藤立育弘
協力　尾竹睦子・熊谷写真館
高岡市教育委員会
高岡市立博物館
太田久夫（富山県立図書館）
朝日奈万里子（富山市立図書館）
宮内庁・小学館

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

万葉の歌—人と風土—

2 北陸

一、しなざかる越

越という名

北陸地方というところは、実におもしろいところです。新潟県の直江津から、富山・金沢・福井を通って、滋賀県の米原までの国鉄を、北陸線といいますね。この北陸線、直江津から米原へ行く列車、つまり京都方面へ行く列車が、上り。米原から直江津、つまり東京方面へ行く列車は下りなんです。富山にいる私などは、上京するときも下りに乗り、帰ってくるときも下りに乗る。お腹をこわしたようなもので、下りっぱなし。（笑声）それが終着駅では両方とも上りになっている。お上りさんなのかお下りさんなのか、考

架空講演「北陸地方」

えていると寝台車に乗りながら、一晩中眠れない。（笑声）北陸自動車道、一般にいう北陸高速道路のことですが、これも同じで、米原方面、つまり京都方面が上りで、直江津、つまり東京方面は下りなんです。

地図をみますと、北が上ですから、日本海・能登半島は上に描かれている。そうしますと、日本海に注ぎこむ河川は、なんだか上へ上へと上っているようにみえるんですね。川は上から下へ流れるはずなのに、北陸では下から上へ流れている。日本海側地域は太平洋側に比べると、後進県とみられている。ですから、下りっぱなしではなく、なんとかして後進県から脱皮して上へ伸びよう伸びようとしている。川まで協力して上へ上へと上っている。（笑声）地図の南北を逆にすれば、北陸の川は上から下へ流れる。ある一時期ですが、ＮＨＫ富山放送局のＴＶ天気予報図は、みごとに日本海が南になっていました。（嘆声）

上越新幹線ができてから、新潟県はグーンと関東に引っぱられました。京都の奥座敷のような若狭地方を抱える福井県は、昔から関西カラーです。新潟と福井にはさまれた富山・石川は、関東と関西の接点になる。両県の中のいったいどこがその接点でしょう。よくいわれることは、関東はソバ、関西はウドンだそうですね。そのソバとウドンの接点はどこか。どうも富山県高岡市のようなのです。なぜならば、高岡駅の売店では、一つのどんぶりの中に、ソバとウドンの両方を入れたものを売っているのですから。（嘆声・笑声）これほんと。

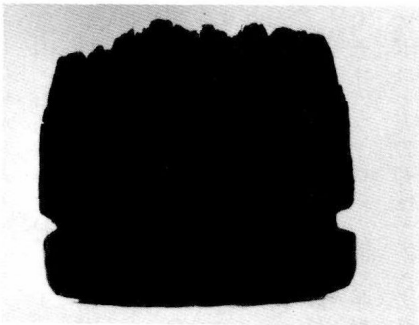
国鉄の上りが下りだったり、川が上ったり、ウドンとソバのチャンポンがあったり、実におもしろいところです、北陸は。そのおもしろいせいかどうかわかりませんが、北陸は住みよいところだというデータがあります。

昭和五十三年（一九七八）九月『朝日ジャーナル』が特集を組みました。「日本でどこが一番住みよいか」という特集です。その住みやすさの県別ランキングの結果は、まったく驚いたことに、日本で一番住みよい県は、実に富山県だというのです。（嘆声）石川県は第三位、福井県は第九位、新潟県は第十二位。東京などは十一位で、富山・石川・福井、いわゆる北陸三県からみると、東京など物の比ではない。北陸が上位で東京は下位。だから、東京に

行くのは下りになる。（拍手）

その北陸三県の位置関係が、太平洋側の方々にはなかなかわからない。能登半島は何県ですかとよく聞かれます。どうお話ししたら簡単に覚えていただけますでしょうか。北陸のある大学で学会がありましてね。懇親会の席上、そこの大学の教授がおもしろい話をしてくれました。日本列島をみると、人の体にみえる。北海道は頭部、本州は胸から胴で、中国地方は足、四国は腰掛、九州は足を載せる台。人が足を伸ばして腰掛けている姿に似ているというのです。そうすると、本州の中心あたりで、ひっこんでいる富山湾は、さしづめおへそというわけ。日本列島の真中に富山・石川はあるわけです。富山はおへそで体の中心。ＮＨＫは放送衛星を使って放送していますが、衛星からの電波は富山県をめがけて発信されているそうです。おへそのあるところは腰です。北陸は腰。だから昔からコシの国。（笑声）その教授がいわれるには、話がここまでくると、必ずコシのあたりで出っぱっている能登半島は何だと質問があるそうです。教授答えていわく、半島はペニンスラ、鉛筆はペンシル、だからあれはペ…（笑声）。そこで教授はこういうそうです。だから、そのようなものを、おおい隠すためにできたのが越中ふんどし。（大爆笑）

これはとんでもない冗談になりましたが、富山湾のへそは、ギリシャ神話でいうなら、大地のへそオムファロス、能登半島はアポロン神の象徴アギエウスの円柱。日本風にいうなら、アメノヌボコ・天の御柱・アメノタヂカラオ・アマツマラ・サルタヒコ。オムファロスもアギエウスの



真脇遺跡の柱

円柱も、陰陽合精の中軸と信じられ、祭神の対象であったようです。最近能登半島の真脇で、巨大な柱のある縄文晩期の祭祀遺跡が発見されました。直径一メートルほどの木柱が、十本ぐらい円形状に建てられた遺跡ですが、実にふさわしいところに巨大な柱が建っていたわけです。

北陸地方の案内が、性のシンボリックな話になりましたが、江戸時代の平田篤胤や鈴木重胤なども、日本神話の性のシンボリズムを指摘しています。話がようやく古代に達しました。古代、北陸地方は越の国と呼ばれました。なぜ越なのか。今度はまじめに考えてみましょう。

海山「越し」て

現在、福井・石川・富山は北陸地方という一つのブロックをなすが、新潟は甲信越地方という別のブロックに属する。古代的ないい方をするなら、前者は北陸道だが、後者は東山道である。現在この二つのブロックは、行政的にも経済的にも文化的にも疎遠である。しかし、古代においては、福井は越前、石川は越前あるいは越中、富山は越中、新潟は越後と、この四県はいずれも北陸道の国々であり、越と総称されていた。

なぜ越というのか。畿内にある都から越へ入るには、近江海（琵琶湖）の北にある険しい山を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com